









△菊葱 七下 △馬齒莧 七下

△苔草 七下 △落 七下

△蓼 七下 △藜 七下

△根芋 七下 △蓴菜 七下

△海松 八下 △水草の花 八下

△夏生類 此部は夏三月の種々  
季のついでにのちのちの

△蚊 八下 △蚊遣火 蚊火

△蚊柱 九下 △蟻 九下

△蟻 九下 △蚤 九下

△螢 九下 △子子 九下

△蝸牛 十下 △蛞蝓 十下

△夏鷹 十下 △鷹鳥屋籠 十下

△鶴 十下 △蠅虎 十下

△蠅 十下 △鶺鴒川 今解今舟  
△夜川

△青鷺 十下 △通鴨 十下

△鮒 十下 △胡鱈 十下

△水鯰 十下 △水鱧 十下

△干鱧 十下 △干鰻 十下

△洗鱧 十下 △鮓 十下

△鮓 十下 △蟹鯉 十下

△鹽鳥賊 十下 △魚蓆 十下

△夏雜 此部は夏三月の種々  
乃雜事をあつる

△短夜 明安と夜  
△蚊帳 蚊蓋

△扇 伏翼  
△團扇

△日傘 十下 △編笠 十下

△夏斬 夏書 夏花  
△夏經 十下

△安居 十下 △夏書 夏書  
△夏行 十下

△新麥 十下 △切麥 十下



煮冷汁 煮冷汁 麥飯 麥飯

麥粉 麥粉 木布 木布

草物 草物 汗衫 汗衫

汗巾 汗巾 手拭 手拭

必用 此部は夏三ヶ月の  
用のこと知れり

夏養生 夏養生 夏天氣 夏天氣

夏風 夏風 夏雲 夏雲

夏霞 夏霞

夏時令 此部は夏三ヶ月の  
時侯の物とある

夏日 夫木 為家

九天鑪焰暖 避暑得深幽

六月玉聲寒 忘年遠久留

深院塵消散 午炎篆烟如

夢晝淹 奧フカキ殿院ハ各別  
涼レク奇廉ニレテ塵

花約為送香来 自捲簾

ノ句ヒラ吹キ送リテ自ラ簾ヲ捲

クタメニ吹タルヤウニ

オモハルハトナリ

クタメニ吹タルヤウニ







水門涼月 挂漁竿 孤月涼

夏曉 夜の明くことつくり 定家

夏朝 夜明しよと明て後云 雅有

夫木 夏朝 為家

夏とあそと家とくじりていふこと

夫木 夏朝 為家

夏夕 暮 玉吟 俊頼

浦人の念もあはれみみらけり

非 蚊のあはれせむらぬ夏夕多道守

夏夜 夫木 入道撰

かき火の光も涼一タヤとの光 後京極撰

六百番哥合 同 夏夜短 定家

夏のよいさうくあけうたまく

心もいやなるといふて夏の夜

のけこ火蚊をう火風涼し。中を

らふ極も夏といふてさきさびう。

月ものころの蚊の声。馬よりほ

非 夏は夜に経るに寝るの起り其角

夏は夜にさふもあふて秋の種一秋

夏は夜にさふもあふて秋の種一晶

詩 夏夜五字對句

簾涼清露夜 山露侵衣潤

琴響碧天秋 江風捲簾涼



詩 夏夜七字對句

詩礎

池邊命海憐風月 囊翠幃

浦占回船惜菱荷 水亭閑

詩 夏夜 詞 明揚慎

湘水魚鱗冷 簟文博山泉

篆罷鑪薰 魚ノオドルケシキヲ

坐愛金波洗火雲 月ニ對シ

阿波ヘヒヤ、カナル波モ日デリ雲ヲ

夏山 龜山百首 了雄

夏山の志を三本流不常りてん

夏山の志を三本流不常りてん

夏山の志を三本流不常りてん

詩 夏山五字對句

山樹含斜日 秀木涵秀色

池風泛早涼 奇峯出奇雲

詩 同七字對句 詩礎

幽谿鹿過苔還靜 夏雲端

深樹雲來鳥不知 冷溪山

夏野 龜山 為尹

夏の志を三本流不常りてん

夏の志を三本流不常りてん

夏川 古今

涼いさ秋やかきひて初瀬川

ふる川舟人の故のつかず有家







陰々夏木 嘯黃鸝

僧院深

斜陽映閣山當水

樹松雲

微綠含風樹滿天

水殿開

詩 夏木之詞

唐 王昌齡

綠樹重陰蓋四隣 青苔日厚

自無塵 夏木立クロミシゲリテ

頭箕踞長松下 白眼看他世上

人 合々人ノ外ハ交ラ

夏柳 葉柳 秋夕

神 萬葉以ハ佐宿木花とあり

新勅 重政

林の樹とむもまありはく

青秦椒 巴椒蜀椒 但州朝

甚美多丹波丹後ハ其技を

州津輕の産大ナリ氣味勝多

山椒ハ世々る時の妙術 灰を

甜瓜ハ又男をハ女の如ク女

非 朝倉本丸丸つよのまハ椒慶友

柚山椒 所々稀ハあり枝葉

山崖椒 葉大キ

細花ハ味美ハハハハハハハハ

春葱ハ初生針のふ

酢醬ハ和ハ生を喰ハ



馬齒莧

警辨草。醬椒草。金非藥。和名まがい草。

① 排 たるきくそへ妹うり馬せ。左

妙術 ところそん汝家の斬掛

置るに馬虫其

苔草。地層

家不入守とつ

路。数冬。花

七月。花さく

春さく

蓼。七種あり。紫。赤。青。香。

馬水。木蓼より播州

津田穂蓼と出と

年中穂ありとつ

藜。苗と

あけりのとてくへさう莖

の成長しとつりのと枝とさす

根草。和名いもわり一云いり

煮て喰へ剥皮乾ても可

蓴菜。嫩莖未だ葉ありさる物と

推蓴といひ稍のひ長ど

ふ者と絲蓴といひ秋まつらう

花とつりのと葵蓴と名づく

海松

水松。状う松のまじく

① 未ははの南は風かうれさるの

ころく涼ありのや此屋定家

② 連 吹くぬとさるふさ海にたつ風 肖相

③ 排 ころろそ波あけりる煙は貝其角

④ ①の海海の意

水草の花

⑤ 連 ありうり水まも池のゆ外泉祇

⑥ 排 ありあまや咲か波乃とあ心計

夏生類

此部あり夏三月ある

蚊。異名 白鳥。暑蟲。○唐土嶺

南ふ蚊。子木。有葉冬青の如

く実枇杷のじし熟とる時

蚊出とつらう。又塞北は蚊

草あり葉の中ふ血虫あり

此むし化して蚊とるるとつ

○又江東。蚊母鳥あり蚊と吐く

⑦ 排 ぼろろく蚊いふか

夏 七



蚊之煙や塵蚊移るのさめ云 其角  
狂はみあつてもあつてもいも生るる  
居りかたをいもやうふべき 宗明

詩 蚊之詞 明 陳成

白鳥向交時言々 應若饑 昼ハ  
カクレテウヘ 進身因暮夜得志入  
テイルシムク 簾帷 一夜ハ巴カ時ヲ得タリトシ  
テイルグクヘモ入り来ルグ  
嘔吸吾方因飛颺汝自嬉 吾等  
ハ汝

清

風一朝至倏忽竟安矣 秋風

フキキタラハスゴクト 柯処ヘカテニトイナリ

蚊遣火 蚊火ともいふ 俊頼

かゆみの煙ふさふさすも  
あゆみの煙ふさふさすも  
詞 形を竹のけの緒をよるや 夜か  
く 走るとふゆは蚊の夢もは

うらむらむらむらむら 煙の霧蚊の  
聲遠くあぶくさびとじり  
せれ 夕白の たび森

非蚊ややわつる方 蚊の多し其角

狂蚊や火の巨燧の円ふく 蚊の  
あぐり 河のすたふく 柳 架柳

蚊柱 蚊の多く集む云 非 蚊  
柱 蚊の多し其角

蜻 蛚子。蝶子。山中。非 凄涼の  
音 柳子 柳子 柳子 柳子 柳子

蛭 水蛭ハ水中より草蛭  
とつる草味よりあつる

笄蛭 といふ者あり状がらふ  
びり 大なる者一尺よりあつる

蚕 蛆 非 鉤形ヤ舩又蚕  
らふ胡やうも 老前

狂 虫のはもやうやくやう痛む  
これマナハのその虫る 道明

螢 新螢。山螢。流螢。異 丹  
鳥。夜光。霄燭。丹良。



暉夜燐。夜半受。燿燿。

⑧ 夫木 知家

井の初風ふりたるやまゝなるん

こぼれてこゝろぬまゝのほゆ

室治首首 水邊堂 頼氏

くれかけのふりたるまきいけしの

みどりしるふらふらなるけ

家集 海辺堂 清捕

そぬ風ふるむくのまほけさぬそぬ

そぬまぬあひやうなるけけけ

夫木 樹下堂 隆祐

そぬ河うまひやあそくくをみ

うそ秋たるまむいりけけ

夫木 猿堂 俊頼

あつちふやうなるけけのあつちふ

たつちふのこころなるけけ

家集 螢火乱風 仲正

風かけのうらあつちふなるけ

玉のひあつくよりのまむい

常盤井普答 螢照細流 仲正

まむいのをそ谷河をてけけけ

そぬのゆいなるけけのゆい

家集 河辺見堂 好忠

ひれ木のふもあつちふなるけ

さそあつちふれてそぬなるけ

長久哥合 漆河堂 経信

いさう火の浪るなるけけのあつち

そあつちなるけけなるけ

同 行路堂 経信

ゆれぬけなるけけなるけ

まふひやせぬなるけの中ね

同 古寺堂 経信

今そあつちの林りなるけ

そぬけなるけなるけ

夫木 螢火透簾 寂蓮

玉すなれふせなるけのゆいなるけ

おひなるけなるけなるけ

後拾 沢堂 公雄

花さなるけなるけなるけ

うのなるけなるけなるけ

玉葉 叢回堂 左大臣

吹色なるけなるけなるけ

そぬなるけなるけなるけ



夫木 江螢 家長  
かゞとさぬぬるし小舟とたふる  
つゝえのやふる敷そ替ひゆ

夫木 燐螢 光俊

日らるれを神の儀をゆやふる  
こびくおりのやふるやん

拾玉 螢火違簾 慈鎮

おとくほふふ草のすけうけ舟  
まふまふまのこまうけてり

詞歌でいひびう。りゆる。おの  
花ぶ。まぬ。ほやうねけらぬあひ  
らるる。月月ふきこく。暁うけ  
うけさ。夕中ふそく。はたわら。  
風みこく。夜深くもゆる。うくま  
の雲。よひの雲。夜ふくもゆる。夜  
さつてりゆる。ま井ふお。まの  
上まていねづく。雨ぬけりまぬ。  
お月西。霧。お中。おはまう。  
本陰。草。まらう。まはす。

草葉はむる。草のあけさの草  
草葉あひゆる。水草あまふゆる

まのこまふくまぬ。まらうま  
草わらふすく。草の春風ふ

まらう。草のあけさの草  
尾む。おまの神まらう。おまの

りらりゆる。後芽あまぢふすぞ。  
竹糸の葉風ふまらう。吳竹の

杖らりゆる。世まらうの葉まの  
風ふまらう。未葉はまらう。玉

はまらう。うらう。たままらう。谷  
まらう。おまのまらう。おまの

まらう。野まらう。おまのまらう。  
草まらう。後田浦まらう。おまの

おまらう。おまらう。川まらう。  
柳。おまらう。おまらう。おまの

おまらう。おまらう。おまの  
おまらう。おまらう。おまの

おまらう。おまらう。おまの  
おまらう。おまらう。おまの







唐李嘉祐

映水光難定凌虛體自輕

水面二志カゲツツ光イツレノ処

二定メ難ク虚ヲ凌ギ高クトビ

ニクツノ体自 夜風吹不滅秋

然トカロレ 露洗還明 風フケテ螢火ノ燈

却テ明光ヲ倍ス 向燭仍藏

燭投書更有情 火ニムカヘバ

少レクタヨリニナルナリ 猶將

流亂影來此傍 簷楹亂

影ノ簷クチヘ楹

詩全 唐鄭谷

故國無心渡海潮 老禪方丈

倚中條 出テセンヲ子リテツル 夜

深雨絕松堂 靜一點山螢照

寂寥 夜アタヤミ 禪室ヘテラシ

故事 螢

フクロニモリテレヨヲテラス

晋ノ車胤ハ 博覽多識

ニシテ書ヲ讀フヲ好ム家貧

シテ常ニ油ヲ得ルヲ得ズ

夏ノ夜螢ヲ集メテ緇ノ囊

ニ入レ盛リテ昏ヲ照シテ讀テ

ルト 務成子螢

ナリ 為丸却矢 火丸ヲ製ス

漢ノ劉子南其方ヲ得テ調

合シテ佩ケルニアルトキ虜ト

戰フテ圍ミレケルトキ矢ノ來

ルヲ雨ノ如クナリシカ劉子南カ

馬ヨリ五六尺バカリニナレバ其

矢地ニ墜テ子南ニ中ラス傷

ナカリシ故虜ノ兵モフシギニ

螢火丸

一名冠將丸 又武威丸ト

トナリ 各一雄黃雌黃 兩各二殺羊角 性ヲ



存ス一 礮石ニ 鐵鐘柄入鐵處  
 燒焦 共ニ未ト為シ雞子黃丹  
 雄雞ノ冠一具ヲ以テ和シ搗チ千  
 下。丸シテ杏仁ノ如ク三角ニシテ  
 絳囊ニ五丸ヲ盛テ左ノ臂ニ  
 帶テ從軍腰ノ中ニ繫レハ五  
 兵白刃ヲ辟ク家戸ノ上ニ掛ケ  
 ヲケバ盜賊ヲ辟ク又能ク疾  
 病惡氣百鬼虎狼破 **試ル合**  
 蜂蠆諸毒ヲ治ス  
 江州石山寺あり此谷の螢常  
 の螢火又倍と毎年芒種ホウレツの節  
 此後五日夏至の朝の後五日に  
 至リ十五日の間と盛リ寺北ハ  
 橋とかさう東ハ川をかさうて  
 曾て外ふあは時節過る時  
 ハ宇治川又至る此所ハ夏至小  
 暑六の間と盛リと然共  
 瀬田の多とふ志う俗ハ  
 頼政の亡魂化して成と云 **腐**

草化成生 礼記 山書

**法** 螢火虫 百枚 雲母石 二枚 共ハ  
 研リ末とシ是を筆以テ  
 亦て何ふてもひらうと現さんと  
 思ハ画の上ニ操るへ一試す  
 己ぬきハ下月の内日の晩光  
 与現年十二夜ある一年の間光有

**子子** 此虫化して蚊とあり  
 蝸牛 蝸牛 蝸牛 蝸牛 蝸牛  
 蝸牛 蝸牛 蝸牛 蝸牛 蝸牛

**蝸牛** 蝸牛 蝸牛 蝸牛 蝸牛  
 蝸牛 蝸牛 蝸牛 蝸牛 蝸牛  
 蝸牛 蝸牛 蝸牛 蝸牛 蝸牛

ハ山あり尺余あるものあり  
 蝸牛も売とてふてわたくし  
 躰より。蝸牛も売とてふてわたくし  
 ひさびさゆくていふちと



そのおろくあるていなり。土  
牛のほのゆるゆるなり

⑤ 夫木 寂蓮

牛け子ふゆまるとるをのめりなり  
角のれいして身をへたのそを

⑥ 蝸牛角 うづまのこ

⑦ 白鹿 しろか

⑧ 蛤 かき

⑨ 附蝸 つけこ

⑩ 故 こ

⑪ ちびく ちびく

⑫ けり けり

⑬ 夏鷹 なつたか

⑭ 鷹鳥屋籠 たかとりやかご

⑮ けり けり

⑯ 鶴 つる

⑰ 白き冠 しろかぶ

⑱ 蠅 はげ

⑳ 赤頭 あかかぶ

㉑ 鷄 けい

㉒ 鷄川 けいせん

㉓ 取 と

㉔ 魚 うし

㉕ 度 た

㉖ 新古今 しんこじん

㉗ 鶉 しん



八十九うら川の文書乃らそら

同 弁蓮法師

うかいねるぬうそそねるれや  
後ふそゆくわう火のうそ

夫木 光俊

は川ぬ小夜ふそねじ桂人  
うさいふいふれ舟くさひそ

拾遺愚草 雨後鷄川 定家

うかい舟村ぬささづうらそ火ふ  
雲るの星乃らけとあそそ

草根 遠近鷄川 慈鎮

うら治川のせふは夏休本うら舟  
あられそそら桂のしそ人

詞 衣川 秋川の舞 夜川ら 舟 務  
川うら火ういそそ。さうそそ。

うらぬうこす 羊 務川のさねそ  
ゆの索 舞大 しろらうそ火わら

さす。教うら。波をそく。うら舟。  
かそそ魚 務はうさひ。さひく

うさひ。かづく務舟子ぬ。舞ぬ。さ  
とこるそ。さそら。のわら。夜 秋川。じ

うらぬい。うらひのさねぬ。ど  
夜。月をい。う。馬。中。ぬ。さ。川。特

は。大。そ。及。う。後。ほ。の。う。雲。ほ。の  
世。志。う。ぬ。特。舟。き。入。夕。舟。夕。日

の。と。そ。と。月。く。さ。夜

俳 務の形ふ舞。名れて。さ。さ。り。荷。兮

務。ふ。ま。て。一。里。い。舟。う。雲。の。松。其。角

古。灯。籠。敷。出。け。浦。初。務。舟。外。全

狂。務。と。は。う。の。い。地。獄。と。か。り。さ。う。う

吾。て。見。て。ぬ。う。あ。い。極。樂。 蘭。室

青。路。鳥。 蒼。鷺。 和。名。こ。と。さ

青。路。鳥。 此。頃。肉。甚。と。美。く

通。鴨。 水。鳥。凡。春。い。古。巢。よ

く。ら。く。其。中。池。中。よ

残。る。あ。り。の。あ。り。て。巢。と。い。う

る。と。居。る。あ。り。と。い。う。と。い。ふ。あ。り

鮎。 異。名。年。魚。 細。鱗。魚。 銀。口。魚。

夫。木 衣。笠。内。大。臣

あ。ろ。う。ふ。遊。は。ま。つ。や。り。わ。ら。う

又。ろ。う。味。は。あ。の。さ。か



詞 松浦川。宇治川。玉川。夏川。さや川。さき川。沢水。いさ川。水車。管。岸。

鮎 山崎の鮎。方鮎。松浦。安成

狂 けりし。いほのせ。はあ。い。生。又。あ。ら。ふ。り。満水

鮎 日本紀神功皇后肥

梅豆羅國 前王島小河小鮎を



日本紀神功皇后肥 前王島小河小鮎を

釣 釣。あ。づ。り。し。き。物。を。其。所。を。梅豆羅國といふ今松浦といふ誤

胡鯖 子。う。り。水。鯖。潮。ひ。じ。用。白。飯

内。是。と。切。流。し。漬。か。り。と。い。り。即。水。を。その。事。なり。

水鱧 桶。水。と。き。へ。魚。池。つ。多。大。坂。より。大。和

へ。送。る。大。和。川。を。船。を。曳。り。る。この。故。水。を。と。り。て。い。う。

干鱧 海。鱧。十。頭。つ。ら。や。い。さ。る。り。の。え

干鰻 非。お。と。よ。ぬ。腹。も。干。さ。し。て。干。豚。か。青。藍

魚藻 下。り。の。春。秋。春。は。委。一

洗鱧 川。に。在。り。の。と。佳。守。三。四。寸。と。せ。い。と。い。う。

覆魚軒 又。作。り。あ。ら。ひ。淨。え。焚。酒。を。て。食。ふ。是。を。洗。と。い。ふ。

鮎 處。々。の。谷。川。又。あ。ら。其。声。五。里。五。里。と。い。ふ。

鮎 鮎。鮎。も。い。り。と。訓。也。名。物。江。州。の。鮎。濃。州。の

鮎 和。州。吉。野。鮎。是。と。釣。瓶。鮎。と。名。つ。城。州。宇。治。鰻。鱧。撰

州 福。島。の。小。鮎。和。州。今。井。の。鮎。越。前

引。田。今。庄。の。鮎。これ。等。い。か。名。物。の。と。い。ふ。











も夏より内の行状をり夏  
り内佛の花を供無縁の区靈面

向又聖經の類を書寫を俗家  
も夏断といぞ房車酒肉等慎む

者あり△安居といふ心静攝  
成安といふ要期此に住まると居云

新麥 早きもの八三月此ま  
れそ凡物五六月の内出

切麥 △冷麥。天寒の時  
ハ温鈍をりらハ天

熱の節ハ冷麥成りらら  
制ハあり。寒温の違ひの之

煮冷 △冷汁。夏ハ食物又  
ハ汁こそも器へ入を

井水おはちねらららら  
たるといれ食ふにげも云

麥飯 狂者計りてさ佐にりて  
るるんま禪はる余也真聖

麥彩 排 粒くの汗をいたく  
麦粉を那 十片

木布 布のひきこきさる  
りのをきむらとら

單物 △汗衫 官家の下  
着といつら

或ハ袖をたといふといつら俗  
ふいふ襦袢のたといふら

汗巾 △汗拭 △汗手拭 汗  
をぬくハ手巾なり又

夏の用具といつら  
排 ぶふま津るもワハ汗拭真丸

必用 此部ハ夏三月の入  
用の事と数多あり心

夏養生 素問云夏三月ハ蕃秀  
と云天地の氣交り萬

物繁茂と夜ハ時ハ早ハ起志とて  
怒事とく英花とて秀とさすめ

天氣とてハ此事と得てハこれ  
夏ハ氣の應じら處カハ養生の道

○水とのこ水ハ洗浴と事と云○あ  
づこ石の上ハ坐卧とて熱といハ瘡と



生下冷されしと生と○風は雷鳴て  
卧こころれ風痺等の病と生と

夏天氣

日蝕黄赤の雨多き  
○月暈赤の多き風

夏風

夏風の中吹萬物と長養  
○夏の火生土と

土と生と土中央の位方角はと  
つと千支まの成末の方と俗

五月西と西風と雨とすの月の時  
節の火氣より火生土の方へ生て

吹風と○東風と常は雨と  
るとも入梅の中と土用は雨と

然るも冬吹て風西の雨  
るる○南風の時の火と對する故雨

夏雲

風の方位とまごかひて  
と雨と

夏霞

暮又西の方赤く  
南へ廻る日と和と秋

ふりて西より北へ

夏部終

俳諧作意早傳

全一冊

俳諧作意早傳の妙備とみごとく  
集め其の影と多く記し俳句の経向  
面白と教くのとよまはる俳諧林  
名人の句と加へて守る外前句の心  
持切家は法式と俳人伝ふるも  
持多紀と終小紅梅白梅老梅八朔  
梅もか梅の發句俳諧數百句と出  
たから俳の心

俳林名句註解

全五冊

俳諧古今の名句と集めあけ  
狂詩と句法と加へたかたゆとの  
と雀門名句數百首と出へ俳の  
画漢文面多のらく出と

七夕由来の記

全一冊

七夕天の川の事とあけあけと  
かく他志の修り

文化三丙寅歲發行

浪花書舗



